

紹介

荻野三七彦編著

『大乘院文書』の

解題的研究と目録』上・下

徳富蘇峰旧蔵の成實堂文庫は昭和十六年に石川武美氏に一括譲渡されたが、大森山王の徳富邸より財団法人石川文化事業財団経営の主婦の友ビル一号館地階のお茶の水図書館へ移されたのは昭和四十年であった。

蘇峰在世時の昭和十一年に「成實堂古文書目録」(以下旧目録と記す)が刊行されているが、その膨大な数の古文書の中心をなすのは大乘院文書であろう。さて旧目録では、第一大乘院文書冊子本、第二大乘院文書巻子本、第三古文書叢鑑二冊、第四より第十七までは大乘院文書以外のもの、第十八雑文書其一より第二十雑文書其三までには大乘院文書が含まれている。これら大乘院文書を対象として、荻野三七彦博士が昭和五十八年より二年有余調査研究した成果を、上下二巻に収載して(財)石川文化事業財団お茶の水図書館より刊行した。体裁

配列などいちおう旧目録に準拠しているが、下巻特に雑文書篇では旧目録以後に文書の出入りもあつたようで配列など新規に考案している。

上巻には大乘院文書の冊子本篇・巻子本篇を収める。冊子本篇には旧目録に採録の一八五点のほかに、今次の調査により新しく見出された文書二七点を新出として追加している。一八五点は文永ころより江戸時代に至る文書が含まれる。そのうち内山永久寺の文書の「内山之記」には十三世紀の作庭技術を示す庭造差図があり、また「河口御庄所当収納帳」は春日社兼興福寺領で大乘院を本所とする著名な越前河口庄の康和二(一一〇〇)年より応長元(一一三一一)年にいたる政所記録で、文庫中で河口庄関係の最古の文書に属する。大乘院文書には、裏文書をも含め、越前河口庄坪江庄関係文書が多いことは庄園研究者には想察されるところである。「悪支引付」は延徳二(一四九〇)年十二月に福智院地藏堂上葺勧進のため設立した悪支興行の文書であり、また天文年間の「諸庄納帳」に挿入された文書などに医師野田宗湛綴書状や薬包紙があるのも興味がある。

巻子本篇は旧目録の六八点のほか新出二点を添えている。六八点中に欠本となっている文書が少なくない。「養和元年記」には、治承五(一一八三、七月養和と改元)

年の閏二月四日太政入道薨として平清盛最後の関係記事がみえ、「侍法眼転任事評定記」の裏文書に、延元元(一一三六)年正月十七日付維安書状があり、「新田兄弟子息以下大將以下千百人被伐了」とて、義貞・脇屋義助・新田義頭(のちの義興)の消息を伝えている。尋尊筆の「横田庄田畠条里坪付帳」の裏文書に一条冬良自筆消息二通あるを発見し、また「出雲庄浮免注文」の裏文書に南北朝時代の開茶資料が見出されるとある。

「古文書叢鑑」は上下二帖あり、編著者荻野博士は文書の整理の都合上未し難い断簡文書を一括して台帖に貼付けたもので、すべてが必しも大乘院文書とは限らぬと説明する。上は九〇点、下は付録二点を加えて五七点とし、鎌倉時代より江戸時代までの文書よりなる。「菩提山寺靈錢到来往來」は天文のころの正暦寺の酒屋課税の請取状であり、「遺物支配注文」は鎌倉時代中ごろのある貴顕の遺品の注文の断簡であるが、下の「歿後仏事条書」と同筆文書と編著者

は鑑定し、これは歿後の仏事を書遺した一〇ヶ条のうち、「一、終焉在所事」など三ヶ条のみ道っている珍らしい文書としてゐる。

旧目録の第十八より第二十までの雑文書の分類は、その後文書の出入りなどあって配列など新しく考慮し大略は時代別として雑文書篇とし、明かに大乗院に関係なき文書は省き新出三点を含めて三五点に整理し一括している。「興福寺東郷水室前関係文書」は、天治二(一一二五)年の敷地・家地の売券・譲状・直米請取状五通で、興福寺文書として最古のものに属する。永正十七(一五二〇)年と推定する三月十一日付大乗院あて三条西実隆自筆書状一幅があり、また新出の裏文面に明応二(一四九三)年とこれも推量する三月二十七日付一条冬良自筆書状を紹介している。なお、成實堂文庫には一万点にも達するという未整理のままの近世文書があり、この調査に着手して見出された大乗院関係の中世文書六点を新出拾遺文書集の題下に補遺として収めた。なお、番外篇として、大乗院文書以外の文書で調査の過程で囑目した学術的資料として優れた文書三点を付録にした。「仁和

寺寛性灌頂記」は南北朝時代の写本で裏文書が二五通あり、中に御子左(二条)為世自筆消息二通がある。「灌頂曆名永仁写本」は空海の灌頂曆名の鎌倉時代の写本であるが、神護寺蔵の空海筆「灌頂曆名」(草稿本とみられる)を研究するうえに好資料となろうと評価している。

本書は編著者の日本古文書学に対する造詣深い学識に即して、文書の形態寸法を詳しく示すとともに、筆蹟による書写年代を推定注記し、また諸文書間の脈絡関係など明らかにすることに努めた。旧目録に欠けていた紙背文書を裏文書として精細に調査収載した。諸文書についてその書きだしの部分を示して該文書の内容性格の一端を披陳し、学術的に重要と思われる部分や特に裏文書は努めて活字化して収載し、また図版を多くかかげている。解題中には利用者に役立つように、関係諸資料をも援用してその見解を述べたものも少なくない。前述した諸篇につき、それぞれあけた若干の例は、編著者に準拠して恣意的にその一端を選んで述べたに過ぎない。編著者は高齢ではあるが、さらに近世文書調査に着手されると聞く。その完了を期待したい。

(A五判 上五七六頁 一九八五年七月下
五三三頁 一九八七年七月(財)石川文化事業財団お茶の水図書館 各二六〇〇〇円)
(小葉田淳 京都大学名誉教授)

京都部落史研究所編

『京都の部落史』史料近代編

京都部落史研究所が刊行中の『京都の部落史』全一〇巻(編集委員は井上清・上田正昭・奈良本辰也・原田伴彦・渡部徹の五氏)は、うち第三巻より第九巻までの七巻を史料編に当てているが、その史料編の刊行も、第五巻「近世2」を残すのみとなった。予定では、史料編完結後、第一〇巻の「年表」(すでに稿本はできあがっている)、そして第一巻「前近代」、第二巻「近現代」の部落史の記述へと、進められていくことになっている。これまで、全国的な部落史関係史料集としては、部落問題研究所編『水平運動史の研究』資料編全三巻、渡部徹・秋定嘉和編『部落問題・水平運動資料集成』全五巻(三一書房)、原田伴彦・渡部・秋定編『近代部落史資料集成』全一〇巻(三一書房、刊行中)があり、また地方